北京とつながる、日本へつなげる

―― 北京日本人学校における総合的な学習の時間の取り組み ――

前在中華人民共和国日本国大使館付属北京日本人学校　教諭
北海道苫小牧市立明倫中学校　教諭　中　脇　尚　子

キーワード：北京、総合的な学習の時間、現地理解、在外教育施設

１．はじめに

北京での赴任１年目は自分の予想を覆すことの連続であった。その中の一つが「北京での生活を楽しんでいない中学生がこんなにいるのか」ということであった。自分は空港に降り立ったその瞬間から北京には親しみが湧いていたし、住めば住むほどこの街が好きになっていった。そんな自分と正反対の感想をもつ生徒が少なくない数で存在している。このことは常にもやもやとした思いとともに自分の心の中に残り続けた。北京に来たばかりの自分は、常に別の場所へ思いを馳せて今できないことばかりを嘆く生徒を悲しい気持ちで見ていることしかできなかった。

しかし２年目の学校生活を終えるころには、自分の思いもはっきりとした輪郭を持ってとらえることができるようになってきた。

中国を好きになるよう強制したいわけではない。ただ、今自分がいる場所を受け入れ、そこでできることを精一杯やり、そこで楽しみをみつけ、何かのせいにするのではなく自分の手で人生を切り開いてほしい。これが自分の希望なのだ。

北京での最終年にあたる３年目に「北京とつながる、日本へつなげる」というテーマで中学１年生の総合的な学習に取り組んだ。この総合的な学習の時間には、自分のそんな思いがつまっている。未熟で改善の余地ばかりの取り組みかもしれないが、自分の思いを生徒は感じてくれたのではないか…そう信じている。

２．北京日本人学校での総合的な学習の時間

(1) これまでの取り組み

総合的な学習の時間に各学年間でのつながりはなく、取り組む内容やねらいについてもそれぞれの学年にまかされている状態であった。赴任１年目は中学部２年生の担任として仕事をさせてもらった。この年の総合的な学習の時間は国際理解という観点で現地校との交流や生徒会行事などいくつかの行事で構成されていた。

２年目も中学部２年生の担任をさせてもらった。この年は同じく中学部２年生を担任する同僚からアイディアをもらい、進路・協同の精神に焦点を当てた「起業教育」に取り組んだ。

(2) 2017年度の取り組みを始めるにあたって

赴任３年目となる2018年度では中学部全体で一貫したテーマのもと、それぞれの発達段階に応じたねらい・内容で取り組んでいこうと方針が出され「この３年間でどんな力を生徒につけていくのか」ということがより明確になったと感じている。テーマは「つながる」。身近なものとのつながりからスタートし、段階を追って世界や自分の未来につなげていこうという考えでこのテーマが設定された。

そこでこの年に中学部１年生の担任をさせてもらっていた自分は、今生徒にとって一番身近な場所「北京」に焦点をあてた取り組みを考えた。

中学部２年生は北京から外へ出て「中国」とつながる取り組みを、そして中学部３年生は「世界」そして「未来」につながる取り組みをそれぞれ企画した。

３．取り組みについて

(1) ねらい

・北京と日本とのつながりを知ることを通して自分たちが国際社会で何ができるか主体的に考える姿勢を養う。
・学年での共同作業を通して、多様性を認め様々な考えを融合させる力を養う。

総合的な学習の時間の計画書には上記２点をねらいとしてあげた。併せて個人的な感情も多々入っているので表記はしなかったが「1．はじめに」で触れた「今自分がいる場所を受け入れ、そこでできることを精一杯やり、そこで楽しみをみつけ、何かのせいにするのではなく自分の手で人生を切り開いてほしい」という願いも込めている。北京と日本のつながりを学んでいく中でそれぞれの国・地域のよさを知ってもらいたい…そう思いながら学習を進めた。

(2) 活動内容

①話し合い活動

取り組みの導入として「中国と日本のつながり」についてグループで話し合いをさせた。この総合的な学習の時間を通して生徒たちにどのような変化があるのかを知るために、まずはこちらからは一切の情報を与えず、純粋にいま彼らが感じている「つながり」を出させた。この活動は導入部分にあたり、まずは話し合いがしやすい題材をと言うねらいから「中国と日本のつながり」について考えさせた。

ホワイトボードを囲んで活発に意見をかわす生徒たち

話し合いの技法としては、昨年度「起業教育」に取り組んだ際に同僚から教えてもらった「グラフィックファシリテーション」という方法をとった。出された意見を紙（今回はホワイトボード）に書きながらまとめていく方法で、論点が分かりやすくなる、他人のアイディアに触発されて新しいアイディアが出やすくなる、感情的な議論になることを避けられるなどの効果があると言われている。30名前後の学年を６つの班に分け、各班で話し合わせた。各班から出たまとめは以下のようなものであった。

ライバル	ライバルであり仲間	互いを評価しあえるライバル	友達	太陽と月	仲の良いご近所さん

②JICA（Japan International Cooperation Agency：国際協力機構）の職員による講話

続いてJICA北京の方に学校に来ていただき、北京ではどのような活動をしているのかを講話していただいた。またこの日赴任先に内モンゴルから北京にきていた現職の青年海外協力隊の方も一緒に来てくださり、具体的な活動内容を講話してくださった。

JICA北京の職員の方からは、JICAが古くから北京に支援をしていることを教えてもらった。大きな事業としては日中友好病院の建設、地下鉄１号線の建設、上下水道浄化施設の建設などがあり、生まれも育ちも北京だという生徒は「自分が生まれた病院が日本の支援でできたものだったなんて知らなかった。嬉しかった」という感想を書いていた。普段よく乗る地下鉄にも日本の協力が関わっていることを知った生徒たちは驚きとともに嬉しさも感じていたように自分には見えた。北京には日本の企業が数多く進出しており、街中でも日本企業の製品は容易に見つけることができるが、思いもよらなかったつながりを子どもたちは感じることができたのではないだろうか。

③『紅丹丹教育文化センター』への訪問

JICA北京の講話から、日本と中国は昔から助け合う関係であったということを学んだ生徒たち。そんな中日の友好によって運営されている施設を実際に見せてあげたいと思いJICA北京の職員の方に相談すると、『紅丹丹教

育文化センター』という施設を紹介していただいた。

こちらの施設はJICAの支援によって建設された「目の見えない人が本や映画を楽しむ施設」である。日本では社会福祉法人日本点字図書館をはじめ様々な団体が視覚障害者向けの映画やテレビ番組の副音声製作を行い、優れた技術と経験を有している。その技術と経験を北京の『紅丹丹教育文化センター』での活動に役立てるというのが支援の内容であった。

施設の中には「From the people of Japan」というシールを貼った機器が多数あり、日本の支援によって建てられたというオーディオブックを吹き込む録音室を見学した。見学当日には利用者の方もおり、日本の支援によって豊かな時間を過ごしている人がいるという現実を実感することができたようであった。

④学校で働く中国の方からの講話

ここまでの学習では主に「日本から北京への支援」について扱ってきた。これではねらいを達成できないだけではなく「日本は北京に色々してあげているんだ」という感情のみが残ってしまうと危惧した。そこで「自分たちは中国（や中国の方々）から助けてもらってはいないだろうか？」という問いかけの意を込めて、本校の中国人スタッフから子どもたちが直接話を伺う活動を設定した。

【中国語講師にインタビュー】

中国語講師には中国語の時間を使って生徒からインタビューをさせた。中国語の時間ということでできれば中国語を使って聞いてみてと促した。生徒たちは「なぜ日本語を勉強しようと思ったのか」「日本の好きなところは」「日本人がたくさんいるところで働いてみてどんな感じか」といった質問がでた。インタビュー後のまとめを見ると、中国語講師は日本に親しみを持ち日本人の良いところを尊敬してくれているということを感じ取ったようだ。

まとめ作業の時にも嬉しそうにインタビューの答えを交流しあっていた姿が大変印象的であった。

【事務職員にインタビュー】

本校には中国人スタッフとして５名の中国語講師の他に５名の事務職員がいる。事務職員の１人、李嵐さんは15年以上前から本校に勤務してどんな時も学校を支えてくれたスタッフの１人である。彼女がどんな思いでこの日本人学校を支えてきてくれたのかをぜひ生徒たちに聞かせたいと思った。

李さんをゲストティーチャーとして迎え、自分が進行役となって話を進めた。李さんがなぜ日本語を学ぶことになったのか、どんな経緯で北京日本人学校で働くことになったのか、今の仕事の内容と心を砕いていること、日本人と中国人の仕事の進め方の違いなど丁寧に答えてくれた。生徒たちはまず李さんの日本語の流暢さとその語彙力に驚いていた。李さんの業務内容に話が及ぶと、学校生活のほとんどの物品が彼女によって発注・確認されているということにも驚いていた。

生徒のまとめには「知らないことがたくさんあった。日本と中国はもっとお互いのことをよく知ったほうがいい」というコメントがあり、私が想像した以上に色々なことを考えてくれたと感じた。

教員が進行役となってインタビューを行った

⑤まとめ

北京と日本のつながりを知る学習を通して、生徒たちはどのような気持ちの変化が出たのだろうか。①話し合い活動と同じ手法、同じテーマで再度話し合いをさせた。約半年の学習を経て各班ごとにまとめられた意見は以下のように変化した。

ライバル　ライバルであり仲間　互いを評価しあえるライバル　友達　太陽と月　仲の良いご近所さん

↓

互いに縁の下の力持ち　キャッチボールをしている友人　なくてはならない存在　互いに興味を持っている　納豆とごはん　お互いを誤解しあった仲

学習する前は「ライバル」という言葉も多く聞かれたし、「日本のほうがいい」というニュアンスの発言も少なくなかった。また「日本が上から目線で中国を見ている」という意見もあった。（ただしこの発言には中国のことを正しく理解していない日本人がこんなことをよく言うという憤りの感情が含まれていた）

しかしこの学習を通して「本当は仲がいい」「2つの国が合わさっていくともっといい」「これまでもこれからもなくてはならない存在」ということを感じたようであった。

４．国際交流弁論大会での発表

本校は毎年、北京市月壇中学校と共催で弁論大会を開催している。今年度は30周年ということで両校がレセプションを行うことになった。本校は各学年ごとに発表することになり、1学年ではこの総合的な学習の成果を発表することにした。代表生徒によるパワーポイントを使った学習成果の発表を行ったのち、学年全員で「世界に一つだけの花」を1番を日本語で、2番を中国語で合唱した。

パワーポイントを使った学習成果の発表では、中国語に堪能な生徒が通訳としてステージに立った。これまで中国語が堪能なことを隠してしまう生徒を何人も見ており、大変残念な気持ちでいた。複数の言語を話せることは彼らの「長所」もしくは「武器」になるはず、中国語を話せるということを誇りにしてほしい、そう願って通訳担当者を募った。発表担当の生徒と通訳担当の生徒の努力には大変驚かされた。通常の読み合わせだけではなく自分たちで時間を見つけ自主的に毎日練習に励んでくれた。ただ原稿を読むという作業ではなく、その原稿に、その翻訳に魂を込めて堂々と立派に発表した。通訳担当の生徒の1人は大変寡黙な生徒であったが、この発表を通して周囲の彼を見る目は大きく変わった。生徒たちの素直な「すごい！」という感想が、1人の生徒に自信と勇気を与えたと信じている。

合唱の取り組みについても生徒たちは大変熱心に練習に励み、会場に自分たちの思いを届けようと頑張っていた。感じるものは一人ひとり違ったかも知れないが、観客みんなが一生懸命中国語で歌う彼らの姿から何かを感じ取ってくれたと思う。

この学びを通して得たものは一人ひとり違う。しかし生徒たちはこれまで見えなかった方向から中国と日本を考え、両国のよさも課題も真摯に見つめていた。そして彼らは北京での暮らしを否定するのではなく前向きにとらえ、今後この経験をどのように生かしていくことができるのかを考えてくれていたと感じている。彼らはここ北京で、前向きにたくましく生きていることを実感した。

北京日本人学校で大切な学生時代を過ごした生徒たちが、これからどんな未来を切り開いていくのか…彼らの未来は私の生涯の楽しみの一つとなっている。

合唱を披露する１学年の生徒たち